

# ドナウ の 四季

2010年・夏季号・No.7

書簡	竹内 啓	1
一流の音楽家が開いた世界	桑名 一恵	2
叙勲への返礼の辞	キッシュ・シャンドル	4
エコノミストのハンガリー回想(最終回)	佐藤 経明	6
書評「ポスト社会主義の政治経済学」	田中 宏	8
緑の丘日本語補習学校	ベニングみゆき	10
三キロマラソン	望月 海央	11
僕が頑張っている事	ラバイ 紀之	11
留学生自己紹介 窪田 さやか・町田 百合絵・森垣 静香		12
ハンガリー滞在回想記	高橋 幸二	14
私が見てきたハンガリーのテニス	盛田 常夫	15
スポーツ行事・運動サークル情報		16
追悼 カシュ・ヤーノシュ		17



## コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

1928年に生まれたハンガリーの経済学者コルナイの自伝。  
第二次大戦後の社会主義計画経済から現在までのライフヒストリー。

「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン  
**コルナイ・ヤーノシュ自伝**

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】  
◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 ◆日本評論社



## 体制転換の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

### 第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

### 第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



## なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ [著] 盛田常夫 [編訳]

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判  
■ ISBN 4-535-78331-4

## 異星人伝説

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。なぜなのか。大きな足跡を残したハンガリー出身の科学者たちの生い立ちからその到達点までを描いた評伝。

## 体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

## ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

盛田 常夫著

■ 2010年1月中旬発売 日本評論社 定価3800円

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。体制転換の社会哲学から経済システム、政治体制、社会動向、イデオロギーにいたるまで、社会経済の全般を捉える。



## 書簡

『ポスト社会主義の政治経済学』を読んで

竹内 啓

ご著書ありがとうございました。大変興味深く一読させて頂きました。今までよく理解できないと感じていた「社会主義から資本主義へ」の体制変換の過程が初めてよくわかったように感じました。理解できた一つの点は、この転換が革命ではなかった(勿論、反革命でもなかった)ということです(ルーマニアは違っていたのでしょうか)。つまり、社会主義体制は転覆させられたのではなく、自己崩壊したということです。「アポトシス」とはまさに適切な表現だと思います。

私は社会主義体制が本質的に不可能なシステムだとは考えません。ただその前提には、生産力が十二分に発達して、生産効率を若干犠牲にしても人々に十分高い生活水準を保証できるようになっていなければならぬのだと思います。そうでなければ、「社会主義経済」は「戦時経済」になってしまうというのは御説の通りだと思います。しかし、ボルシェビキ革命政権が成立したときのロシアの生産力水準はあまりに低すぎました。従って、そこに社会主義を建設することは無理でした。レーニン・ボルシェビキらはそのことを十分に知っていたので、西ヨーロッパのプロレタリア革命に期待したのですが、それが裏切られ、しかも内戦に勝ってしまったので、「生産力の低い国での一国社会主義」という転倒した試みに乗り出さざるを得なくなったのだと思います。

またロシア帝国の継承国家となったソビエト連邦は、自ら広大な中央アジア、シベリア等の「国内植民地」を持つ「帝国」となり、更に第二次世界大戦に勝った結果として、ソビエト連邦は東ヨーロッパ諸国をその帝国主義的支配体制に組み入れ、そこにも無理な体制を輸出することになったのでした。

今から考えると、無理な社会主義体制が崩壊したのは当たり前で、むしろソビエト連邦が70年も存続し、その間、ヒトラーの

侵略を跳ね返し、また一時アメリカと張り合う超大国になったことの方が不思議と思われまます。

私がまだよくわからないのは、ソ連と東欧との関係、ソ連の東欧に対する政策です。ソ連は東欧諸国が社会主義圏から逸脱することは(ゴルバチョフが出てくるまでは)、絶対に許そうとしなかったと思います。それ以外の点では、各国(の共産党指導者)に意外に自主的に行動する自由を認めていたように思われます。その点で、御著書の中でライク、ナジの処刑がスターリンやソ連共産党が押し付けたことではなく、むしろラーコシやカーダールが要求したことだったと書かれていることは、私には大きさにいえば、衝撃的なことでした。

更にそこでよく分からないのは、ソ連の東欧諸国との経済面における関係です。ソ連は第二次大戦直後東ドイツや満州などで略奪行為を行ったようですが、その後より手の込んだ「搾取」のシステムを作り上げることはなかったように思われます。コメントはありましたが、それを社会主義諸国を一つの「社会主義市場圏」に統合して国際分業体制を作り上げ、そのなかで、ウォーラシュテイン流に言えば、ソ連(或いはロシア)が「中核」となってその地の国々や地域を「周辺化」するということになかったように思われます。むしろ東ヨーロッパの国々はそれぞれ「ミニチュア国社会主義」となって、いっそう無理が甚だしくなったと思います。そのために東ヨーロッパ諸国間の経済的結びつきは弱く、また政治的にもばらばらな形で非社会主義化が行われることになったと理解していますが、それでよいでしょうか。

そうしてまたこのような状況から東欧諸国がEUになだれを打つように加盟した結果、彼らはすでに高度に経済統合が進んでいる西ヨーロッパに対して、ばらばらな形で「周辺化」される危険性があると思います。が、いかがでしょうか。

もう一つ私にはよくわからないのは、東欧諸国における共産党政権の行った「近代化」の評価です。勿論、東欧とはいっても第二次世界大戦前の社会の発展レベルはかなりまちまちで、チェコのようにすでに十分近代化していた国と、ルーマニアやブルガリアのような「遅れた」国々では状況が異なっていたと思いますが、「社会主義化」の中でそれぞれ一種の社会革命「近代化」が行われたのではないのでしょうか。その結果は社会主義政権崩壊後も残っているように思われます。例えば、農業における集団化政策は社会主義体制の下でも早い時期に失敗に終わったことが明白になっていたと思いますが、しかし他方、体制が崩壊しても旧地主が復活するようなことは全くなさそうです。このような点は社会主義体制のポジティブな遺産として評価されてもよいのではないかと思います。或いは、東欧の社会主義体制は新しい社会を建設することには完全に失敗したとしても、古い社会を破壊したことは事実ではないかと思えます。

また東欧諸国は「ミニチュア国社会主義」のモデルに従って、重工業中心の工業化を進めたと思います。それは国際的競争力を持つような産業を作り出すことには失敗しましたが、それでも何らかの遺産は残ったのではないのでしょうか。勿論そのなかには市場経済化の中で「負の遺産」として残ったものもあると思います。

勝手なことをいろいろ書かせて頂きましたが、私にも改めていろいろなことを考える刺激を与えて下さったことに感謝します。

(たけうち・けい 東京大学名誉教授)

# 一流の音楽家が開いた世界

桑名 一恵

6月に日本クラシック音楽界を代表する2人の音楽家、ヴァイオリンの篠崎史紀さんとチェロの古川展生さんがコンサートの為にハンガリーを訪れた。この両氏のコンサートをマネージしたが、今更ながらこの2人の音楽家から学んだものが多かった。私自身も音楽家の端くれだが、この二人から学んだものはどんなジャンルにも共通して関係していくものではないかと思う。



篠崎：ブダペスト公演にて

今や日本オーケストラの顔といっても過言でないNHK交響楽団第1コンサートマスターを務める篠崎史紀さんが6月初めにブダペスト入りした。「磨様」とも呼ばれ、音楽家のみならず多くのファンからも親しまれているマエストロは、4年前より年に1度はハンガリーを訪問して、日本とハンガリー両国の音楽部門の大きな架け橋となって頂いている。青年時代をウィーンで過ごした篠崎磨様にとって、ハンガリーはホームグラウンドのようなもの。ハンガリー公演に際して、失礼ながらも、どんなテーマでのコンサートを仕上げようかと質問させて頂いている。アイディアマンの篠崎氏は、いつも面白い題材を提案してくれるのに驚かされるのだが、今回は「ハンガリー版ジプシー音楽」はどうかとの話。「エ、そうきたか!」とびっくりした。

ジプシー音楽はクラシックとは正反対の領域。まず譜面が存在しない。さらに、共演者としてジプシー音楽家を起用したいというリクエストも。譜面を解釈して演奏するクラシックと、演奏の正確性を犠牲にしてその場の雰囲気やラフに演奏するジプシー音楽のコラボレーションなどできるのだろうか。しかし、これはハンガリーだから出来ることではないか、一度はやってみる価値があるのではないかと。とにかく面白い企画を積極的に推進してい

る私は、「やりましょう、それでいきましょう!」と引き受けた。通常のクラシックプログラムであれば2回のリハーサルがあれば、プロ奏者たちは本番に向けて仕上げてしまう。しかし、今回は勝手が違う。ジプシー音楽はいわば伝承民族音楽。ジプシーの楽士は譜面なしでも良いかもしれないが、クラシックの音楽家はそうはいかない。演奏会である以上、レストランで弾くような調子でジプシー楽士に合わせるだけなら、コンサートを開く意味がない。他方、ジプシーの楽士にはレストランで弾くようなラフで不正確な弾き方ではなく、きちんと音を取って弾いてもらわなければならない。だから、このコラボレーションはいわば水と油を混合するようなものなのだ。もちろん、この試みが簡単に実現できるとは誰も思っていなかった。ジプシーの楽士の他に、ハンガリー人ヴァイオリニストも入るから、日本人・ハンガリー人・ハンガリー系ジプシーと3タイプの混合コンサートになる。クラシックの音楽家には完成度を高めてからでないと人様の前では披露出来ないというプロ精神があり、ジプシーの楽士にもクラシックの音楽家に負けない演奏をしたいというプライドや気持ちがある。このプライドのぶつかり合いがこのコンサートに参加した音楽家の凄いところでもあり、篠崎さんがこういうコンサートをリードできるという力をもっているからこそ、日本のクラシック音楽界も向上してきているのだと確信した。このコンサートの成功はプリマーシュ(ソロヴァイオリン)を務める篠崎さんのパワーと強い指導力にかかっていた。互いに相当な量



篠崎：セーケシュフェールヴァール市野外ステージにて

のアドバイスを言い合い、緊張感のある空気が漂う意見を理解するまで言葉と演奏で交し合った。本番直前までのリハーサルま



古川・教会コンサートでバッハ：無伴奏チェロ組曲を披露

でメンバー全員が力を抜く事無く、バスタオルを用意したほうがいいのではないのかと思ったくらい汗だくで綿密に合わせをしていた。ジプシーの楽士は篠崎さんの指示を見逃すまいと、レストランではまずみられないほどの緊張感でプリマーシュの音を追っていた。これほどの緊張感で自らの民族音楽曲を弾いたのは、多分、これが生まれて初めてだろう。一つ一つの音をおろそかにしないクラシックの神髄とその場の雰囲気や大切なジプシー音楽の融合が、プリマーシュの圧倒的な力によってまとめられたのである。ジプシー音楽がクラシックに変貌した瞬間である。

レストランでしかジプシー音楽を聴いたことのない聴衆にとって、この夜のコンサートは驚きの連続だった。とにかく、ジプシー音楽がクラシックになった。ハンガリーの聴衆がこれに歓喜したのだ。「csoda(奇跡)だ!プリマーシュは天才(zsenialis)だ!」と口々に叫んでいた。ジプシー音楽にクオリティーが与えられた。レベルの高い演奏と演奏家の感情融合が観客に感動を与えた。曲ごとに盛大な拍手と「ブラボー!!」が連発された。篠崎さんご自身も新境地を開いたようだ。何か確信を得たようで、これからの演奏活動に大きく影響を与えるのではないかと思うほどだった。

篠崎さんのコンサートを終えた6月中旬には東京都交響楽団首席チェロ奏者の古川展生さんが、ソルノク交響楽団との共演のためにハンガリーへ入られた。古川さんはハンガリーのリスト音楽院で学び、今は日本を代表するチェリストである。今回は1週間で3つのチェロ協奏曲を演奏した。聴衆には聴き応えのあるプログラムで嬉しいのだが、奏者にはかなりの前準備と勢いが必要とさ

れる。気持ちの面でもかなりの調整が必要とされたのではないかと思う。

今や押しも押されぬチェロ奏者として活躍する古川氏だが、会った瞬間お願いされたことは「練習室をとって欲しい!」ということ。毎日のスケジュールはオーケストラとのリハーサルがメインで、個人練習時間が確保されていなかった。だから、空いている時間は可能な場所で、個人練習に当てるのだ。当地に留学経験を持つ古川さんならてっきり数年ぶりのハンガリーを散策したりして楽しむ時間をとるのかと思っていたが、ハンガリー入りした瞬間から自分のコンディションや集中力の調整に取り掛かっていた。

ブダペスト公演の本番前のリハーサルを居合わせたのが、初合わせのオーケストラと会場の音の回り方などの感触を得ながら、自身の奏でる音の一つずつ確かめていた。本番では彼の音に引き寄せられるように全ての聴衆が聴き入っていた。彼もまた自身の新たな未知な世界へと挑んだわけだが、まさに彼が奏でるチェロ世界に私たちは包まれてしまっていた。

今回、この優れた2人の日本人演奏家を大変誇りに思った。自らを厳しく律する態度、新しい可能性にむけて挑戦する姿勢、演奏家をまとめ惹き付けるオーラ。これさえあれば、日本だけでなく、世界のどこでも、またどんなことにも立ち向かえるのではないかと思う。失敗を恐れるのではなく、一つの壁を乗り越えたその先にある自分への自信、そこへと繋がる何かを得ることが大切なのだと思わせてくれた貴重な体験だった。



古川・日本人学校訪問での演奏

## 叙勲への返礼の辞

2010年5月26日  
キッシュ・シャーンドル  
翻訳 キッシュ・レーカ

はじめに、大変光栄な勲章、旭日中綬章の受賞に対し、深い感謝の気持ちを表したいと思います。両国の経済関係促進を手がけてきました約30年間の間では、複数の日本やハンガリーの機関、パートナーと友人の手助けが必要でした。この度の勲章は彼らの働きに対するものでもあると信じています。長い間のご協力をここで感謝申し上げます。

両国の関係は深い歴史を持っております。日本とハンガリーはお互いの事を友好的な国としていつも捕らえておりました。これは歴史の荒波の中でも変わることはありませんでした。日本とオーストリア・ハンガリー二重帝国は1869年に友好、貿易、航行条約を結びました。歴史的な事実ですが、ハンガリーはその当時オーストリアの影なる存在でした。けれども条約が結ばれた当時から事業家のレベルでハンガリー人は日本にいました。1869年の秋に、二重帝国の一行が日本の土地を踏むころには横浜

にクーン社が店を出しておりました。最初のころの関係を探ってみますと、文化がとりわけ大きな役割を果たしていたことが分かります。例えば1886年に、明治天皇陛下の前で演奏をした初めての外国人音楽家の中には、バイオリニストのレメーニ・エデ氏がいました。1890年辺りから両国の直接の貿易関係も発展していきます。ハンガリーは銅、米、家具などを日本から買い、砂糖、魚雷、レントゲンチューブを日本に売りました。残念なことに、第一次・第二次世界大戦の間は公式な外交・貿易関係が途切れてしましますが、その後、関係がまた再開され、新たな力でなお一層関係作りが続きます。

ハンガリーでもあまり知られていない技術の天才についてお話ししたいと思います。シコシ・ヤーノシュ氏は第一次世界大戦中にロ

シア軍の捕虜になり、シベリアのヴラジヴォストクの近くに連れ去られました。生まれながらの才能でどんな機器でも直すことが出来、新しい機器も自ら作ることができたのです。捕虜収容所でもビジネスを始めていた様です。ロシア軍から日本軍が収容所を引き

取った時にハンガリー人捕虜の状況が大分よくなりました。24歳の時に自由の身になるのですが、お金持ちとして横浜に到着し、自動車修理所を設立し、そこに住む様になります。その後、冷蔵庫製造の方面に移っていきます。日本初の工業用冷蔵庫は彼が設計し、製造しました。日本人の女性と結婚し、家族を持ちます。横須賀の潜水艦ベースに自由に出入りができたそうです。日本からハンガリーに戻るつもりはなかったようです。日本を理解し、日本人と仕事をすることがとても好きだった様です。1969年に亡くなり、

横浜外人墓地に眠ります。妻の糸恵さんは墓石に次の誌を書きました。

ジョン・シコシここに眠る。

数奇なる運命のもとハンガリーに生まれ日本に死す。  
秀でたる素質とたゆまざる努力と意志の人。  
与えることのみにて求めることのなかりし人。  
その碧き瞳、やさしき声、  
強き腕よ。  
ああ我亡きあとこの稀なる人を  
かくも切なく偲ぶ者のあらんや。糸恵

なぜシコシ・ヤーノシュの話に私が興味を持ったかと言うことですが、彼は現地に溶け込むことの大事さを知っていたからです。技術的にも、人間的にも難しいことが多々あったに違いない。失敗も色々あっただろう。しかし、彼はそれらの問題を乗り越え、日本人と共に仕事をする方法を学んだのです。たった一人の外国人として日本人のなかで仕事をしたのです。

さて、私はこれと似たようなことをハンガリーで目の当たりにしています。数人の日本人がハンガリーに来られ、工場を設立する。私の勤務中にTDK、マジヤールズズキ、シャルゴタリヤーン市のグラスウール、ソニー、デンソーなどなどの建設がありました。許可取得から建設、試運転、そして生産までの過程でさまざまな問題点が発生しました。数人しか現地にいなかった日本人はハンガリー人との仕事の方法を学びました。大きな問題も、些細な問題も一つずつ片付けられ、場合によっては時が解決をした問題もありました。人間的な衝突の背景にはお互いをよく理解できないことがあったと、私は思います。日本とハンガリーの仕事のリズムに違いがあります。理解したい姿勢があればほとんどの問題が解決できます。現地にいる企業同士が、職種が違っていても、ハンガリーでの経験をお互いに素直に打ち明け、相談した方が問題点や失敗を防ぐことができるということは、私にとって大きな発見でした。そして、スピードは遅いですが、ゆっくりとハンガリー人も日本の仕事文化に慣れ、変わってきていることも忘れてはいけません。融合が始まっています。

品質についてもまたお話ししたいと思います。ヘレンド磁器はハンガリー人の誇りです。私は1986年の大相撲日洪友好杯の設立者の一人でしたが、この友好杯はハンガリーの名を日本で広め、ヘレンド製品の輸出の促進で大きな役割を果たしたと思います。私は友好杯を20回以上渡しており、そのたび友好杯のマーケティングの力を感じました。日本市場の要望を探り、数多くの新製品が日の目を見ることになりました。例えば、キリン・マグコレクション専用の6種類のビールジョッキなどがその一例です。ヘレンドでは日本の品質管理システムを導入しました。160年の歴史を持つ工場ですので、磁器製造で知らないことはないと思っていたので、90年代の初めに日本の監査官がわが社の製造・品質シ



キッシュ家と伊藤大使ご夫妻

ステムの照会をすることを承諾するのにだいぶ時間がかかりました。大きな改善、小さな改善、まだまだする余地がこんなにたくさんあると判明した時はびっくりしました。改善の方法とその影響を目の当たりにしました。はじめのうちは反発もあり、導入に時間がかかる場所もありましたが、実行してよかったと思います。1996年にはヘレンド社はIIASA-Shiba 賞を受賞しました。

まとめて言いますと、今日現在まで、「品質とは何か」、「良い工場の建て方」、「工程の改善方法」など、勉強すべき点は数多く残っています。きっと将来的にもテーマに昇ることと思います。

年々世界がスピードアップし、コミュニケーションになんの障害もなくなっていることが見えます。けれどもその反面、座って、ゆっくり話し、解決すべき問題点も増えてきているように見えます。私が率いるハンガリー・日本経済クラブもこの問題点を重視し、ホワイトテーブル外交の重要性を発言しています。日本についての知識を若い世代の間で広めることを大事に思いますので、2005年から5年おきにハンガリー人高校生の間で日本についての全国的な知識大会を開催しております。

私はこれらの目標は重要であり、かつ意味のあることだと信じています。この度の大変光栄な叙勲はこの道を歩んでいくための力の源となりました。

ありがとうございます。

## 80年代のハンガリー

佐藤 経明

80年代は、70年代末の東欧累積債務危機の表面化を前触れとし、80年8月のポーランド、グダニスク造船所の大ストライキをきっかけにした独立労組「連帯」の成立と政労交渉、いわゆる「グダニスクの暑い夏」で開けた。私は「連帯危機」がピークに達した81年3月初めから一月ほどポーランドに滞在した後、ブダペスト経由で帰国した。

ところで私はこれまでフルシチョフ解任(1964年10月)、連帯危機最中のポーランド、ゴルバチョフ登場(1985年3月)直後のソ連といった、旧ソ連・東欧の歴史的な節目に居合わせる幸運に恵まれたが、この二番目だけはある程度、私の『予測』が的中した結果だった。

東欧累積債務危機の目玉はポーランドのリスケ(債務返済繰り延べ)だったが、それを巡る険しい論議の最中、79年10月にポーランドの翌1980年度経済成長はマイナスという信憑性の高い予測が出た。その頃、日本学術振興会の海外派遣申請締め切りは10月末だったが、私は「これはもう何か起こる」という予感で急遽、申請したのである。

ポーランド派遣申請者など多くなかった頃のこと、すぐ採用され、1980会計年度中に出国ということになった。講義や年度末試験の義務の関係上、会計年度末に近い1981年3月初めの出国としたのだったが、その間に1980年8月の「グダニスクの暑い夏」でポーランド情勢は激変したのである。ここまでは勿論、私が予測できたことではなかった。

グダニスク政労交渉では、政府側顧問にヨゼフ・パエストカ、連帯側顧問にタデウシュ・コヴァリーク、ヤドヴィガ・スタニスキスといった旧知の経済学者が顔を並べて対峙していたから、私にとっても他人事ではなかった。この時、急進派のスタニスキスは

「全要求貫徹」を叫んでレアリストのコヴァリークを颯爽させたらしかった。

何分にも政府が弱腰だったから「36項目」の要求が全部通ってしまったのだが、経済危機の中で実現できるはずもない要求が全部通ったのだから、当事者でない私も「どうなることか」と憂慮の念を深くした。改革派のポーランド経済学者たちは、綺麗な市場モデルの改革構想に耽るばかりで、現在の危機からそこまでどう『橋』を架けるかを議論している向きは皆無に近かった。ポーランド内外でソ連軍事介入の危惧が高まっていた頃のことである。

ブダペストの経済研究所では、今日、ネオリベラルのイデオロギーになっているパウエル・タマーシュがただ一人、胸に「連帯」のバッジをつけ研究室の壁には「連帯」の旗を立てていたのも印象的だったが、何と云ってもニュールシュ・レジュール(当時、アカデミー経済研究所長)との議論の鮮烈な記憶に代わるものはない。

当時の手帳を取り出してみると、私は4月7日にニュールシュさんに会っている。ニュールシュさんの話し方は最初からして極めて端的だった。「いま、ポーランドの『連帯』に向かって吠えている犬が三匹いるが、そのうちチエコは吠える振りをしているだけだから心配ない。しかし、ソ連と東ドイツには『安易な解決』(と、拳を握る格好をして見せて)に傾斜している強力な勢力が存在する。4月末までに情勢を安定させなかつたら、危ない」。

ここまで率直な話し方をしてくれた人はかつてなかったから、私が深く感動したのは言うまでもない。ニュールシュさんの話し方にはどこか「リークしても良い」と言わんばかりのところがあったから、私はブダペスト経由でワルシャワ取材に向かう旧知の「朝日」記者、S君に託して、マイクロ・テープ

に吹き込んだ警告メッセージを送ったのだった。

危惧されたソ連の軍事介入は同年12月13日、ヤルゼルスキ政権による「戦争状態宣言」(戒厳令)と「連帯」非合法化で「代行」されることになったが、この時のニュールシュさんとの議論は、今もまざまざと脳裏に蘇ってくる。

ニュールシュさんは1923年3月生まれ、元は印刷労働者で1940年ハンガリー社会民主党に入党、戦時中も国内で活動していた。戦後の強制的な「社共合同」でハンガリー勤労者党(共産党)員となり、1957年に党中央委員、60年代半ばからの経済改革への動きを党上部で主導して内外で「ハンガリー経済改革の父」と呼ばれた。その後、政治局員にもなったが、チエコ軍事介入後の「保守逆流」のなかで1974年3月、政治局員から下ろされた。しかし、中央委員のポストは保持したまま科学アカデミー経済研究所長の職にあった。体制転換直前に党名変更された「社会党」党首となったが、1994年、社会党が政権に再び咲いた時も、政府首班の座には着かなかった。

ニュールシュさんは戦後、カール・マルクス経済大学の夜間部に入学、経済学を学んだが、学位は持っていなかった。あくまで「ミスター・ニュールシュ」だったので、どう『敬意』を表するか、いささか困ったが「ミスター・ディレクター」と呼ぶしかなかった。ある時、私がチコシュ・ナジと話していた折、うっかり「ドクター・ニュールシュ」と言ったら、彼が少し皮肉っぽく「ニュールシュはドクターか?」と言うので、「いや、ドクター以上だ」と応じたことがある。ことほど左様に、学歴のいかに関わらず学者たちの尊敬を集めていた。

1994年に政権を奪回した社会党が汚職スキャンダルにまみれて1998年国政選

挙で大敗北を喫した時、ニュールシュさんは自党のことでありながら「社会党は敗北に値した」と私に語った。あくまで誠実な人であった。ニュールシュさんは80年代末に一度、来日したことがあるが、その時「マゴにささやかな土産を買って帰ってやりたいがおカネ(外貨)がない」ということで、大使館員が立て替えて上げたとも耳にした。

英語で“decent”という形容詞を付けられる人は多くないが、私がこの言葉で真っ先に思い浮かべる人は、ニュールシュさんである。

東欧累積債務危機は1982年の中南米債務危機の煽りを受けて増幅され、ハンガリーもリスケの直前まで追い込まれた。しかしこの時、国立銀行首脳部は「ポーランドのようにリスケをやったら、国の信用はがた落ちだ。最後のードルまで闘う」と腹をくくり、カードールの全面的支持も得て、まるで「日銭」を動かすような金融操作で急場を切り抜けた。この時の国立銀行首脳の「奮闘」は賞賛に値した。しかし、その代償は大きく、国内経済は厳しい緊縮を余儀なくされた。

だが、それは60年代後半以降の経済改革に対する審判でもあった。西側で一般に抱かれていたイメージのように「市場機構」がビルトインされていたら、企業側に引き締め圧力が高まったはずだが、対外債務急増に驚愕した政府がいわば「手動ブレーキ」で引き締め政策に転じるまで拡大基調は止まらなかったからである。

チコシュ・ナジが70年代末に考案した「競争価格システム」は、外貨換算レートを通じて世界市場価格を国内価格に転移するというもので、伝統的な労働価値論を基礎にした価格形成方式からの離脱という意味では理論的な「突破」ではあったが、実際には「机上の空論」に過ぎなかった。

この頃から新しい改革の波が始まったが、それは個人営業の規制緩和、企業では「労働チーム」、一般には小規模協同組合やリース経営の拡大を基調にしたものだった。個人営業にしても、例えば私営のケーキ屋さんが余り便利でないところに500メ

ートルも離れてポツンポツンとあるのでは「逆独占」なって競争は働かない。私営を認めるならば思い切って沢山認めないと意味はない、というコルナイの言葉通りだった。

労働チームというのは、労働者が何十人かチームを作って企業の設備を借りて正規の労働時間後に追加生産をする。企業に設備使用料を払った後の実入りは自分たちで分け合うという仕組みだった。

小規模協組で目立ったのは商店やとくにプティック経営などで、建前としては3人以上(実際は一人のことが多かったらしい)が資金を出し合い、材料は小回りを利かせて良いものを仕入れ、腕の良い職人を雇ってプティック物を作る。デザインブックはフランスやイタリアから幾らでも入るから簡単である。

本麻のブラウスなどは西側ではもう高くなり2万円では買えなかったが、こうしたプティックでは8000円くらいで買えた。「東欧のお土産はもう結構よ」と言っていた家人が「またブラウスをお願いね」と言い出したのはこの頃のことである。

しかし、一番身近に助かったのは、リース経営のレストランだった。それまで公営のレストランを入札制によるリース料を払って請負人が経営する、ほとんど私営レストランと変わらないシステムである。途端に味もサービスも良くなったから、どこを選ぶか楽しみになった。しかしコルナイの話によると、不便な通りにある経済研究所の食堂は、入札する引き受け手が無かったそうだった。

これらは皆、今日のみで見たら生温いものだが、当時にとっては極めて新鮮だった。こうした擬似私経営の飾りつけは悪趣味なものが多かったから、街は俄かにげげげげしくなった。住宅団地の中庭に入ると、向かい側の一階が商店になっていたりした。

これらは経済改革や経済システム論の用語でいうと、所有・経営の「ハイブリッド化」だが、ともかくそれまで「タブー」だった公的所有支配に最初の手が付けられたのである。

しかし、「所有論」の七面倒くさい論議はともかく、その「本音」は「政府はオーソドックスなやり方で所得を増やしてあげることにはもう出来ないから、みなさん、適当にやって追加収入を得てください」という、極めてハンガリー的な「プラグマチズム」ではなかったか。街を歩き回りながら、そんなことを考えたりしたのである。

だが、それは結果として経済の「混合経済化」を促進するものとなった。いつかは「単一の国有・国営経済」になるというのが伝統的な社会主義イメージだったとすると、実態はそれからますますかけ離れてゆくわけだから、理屈でもどこかでそのギャップを埋めなければならない。こうして支配政党の改革派多数は伝統的な将来社会像を放棄、実態的には社会民主主義に次第に傾斜して行くことになった。

ハンガリーやポーランドは特に突出していたけれども、各国とも支配エリートですら次第に体制護持の信念を失って行ったのではないか。80年代を通じてイデオロギーや一党制支配の「儀式化」「空洞化」が進行したことが、次に来る体制転換に与えた影響は決して小さくない。「ローマ」ならぬ「体制転換」は「一日にしてなった」のではなかった。

(さとう・つねあき

横浜市立大学名誉教授)



社会主義と呼ばれた経済体制が体制転換後どのように変化しているのか。ハンガリーの経済学者コルナイの著作を積極的に日本で紹介され(最近では『コルナイ・ヤーノシュ自伝』日本評論社、2006年)、同時に『ハンガリー改革史』(日本評論社、1990年)、『体制転換の経済学』(新世社、1994年)で体制転換の開始とポスト社会主義期を独自の視点で解明されてきた盛田常夫氏の3冊目の著作が十数年ぶりに上梓された。一般的に、書評は章別構成を紹介して、その最初から紹介するのが普通であるが、ここでは盛田氏のポスト社会主義論をより鋭角的に浮き彫りにするために最後の第10章から入っていきたい。

者はコルナイの成功していないとされる「総括的分析」「統合理論」をどのように提示しているのか。その溝を埋めようとしたのが「体制転換の哲学」と題した第1章である。最初に、体制転換のなかで崩壊したものは「計画経済」だったのか、と問う。そこで「国民経済計画の不可能性」テーゼを説く。経済学は国民経済全体の計画可能性や均衡存在証明に力を注いできたが、それは国民経済の具体的管理には役に立たなかった。経済計画化とは極めて限られた物財のプリミティブな配給割当調整であり、この割当調整



を基本とする経済社会が20世紀社会主義経済である。そのプリミティブなシステムを維持するためにも単純明快な統治システムが必要となり、それが「経済を政治的に統御する」というテーゼを有効にした。では何から何への転換であったのか。著者は「配分(配給)システム」から「交換システム」への転換として概念把握する。このように把握された「配分」と「交換」の特性は、著書の表1.1(p.7)にあるように、社会発展を規定する基本的契機、本質的要因＝社会・経済的モーメントで比較される。したがって、「配分」の社会経済的モーメント群(物理的・片務的コミュニケーション、官僚制、人格依存・非文明化、閉鎖性と秘密性の組織化、権威への依存、単純化への退化、劣化的・自己破壊的発展)がコルナイ理論とは異なる「社会主義経済統合理論」

をスケッチしたものであり、そこから「交換」の社会・経済的モーメント体系(情報的・双務的コミュニケーション、自己組織化された市場制度、非人格・文明化、開放性と透明性、自立と個人責任、複雑性の継続的な増大、自生的・継続的発展)への移行過程がポスト社会主義の政治経済(学)ということになる。

この対比と移行のなかでは以下の2点は極めて重要である。(1)交換は「市場」と同義ではない。各労役の相互交換は同等性と対等性を前提として必然的に民主主義制度を生み出しそれを促す。(2)「交換」をベースとする社会は自立(律)的発展の契機を内部保有するのに対して、「配分」をベースとする社会は自立的発展の契機を有しない。なぜ後者は「自立的発展の契機」を持たないのか。この終焉した社会主義は、マルクス主義理論の分析単位となるような社会構成体ではなく、「社会主義的イデオロギーによって構築された一時的な社会経済状態」「強権的支配によって維持される社会」だからである(p.13)。この点はコルナイと決定的に相違する。

このような20世紀社会主義の体制認識は「体制転換アポリア(矛盾する命題)論」につながる。20世紀社会主義体制は次の世代や社会に継承すべきものを何も残さない。だが、旧社会の社会関係や社会機能が死滅するからといってそこで生活していた人々が死ぬわけではない。ポスト社会主義社会に生きる者も前体制をきたした同じ人々である。だから、そこに体制転換のアポリアが生まれる。同じ人が体制転換を担う以上、人々の意識や行動規範は徐々にしか変化しない。その転換は歴史的タイムラグを要する。そこから社会転換における基底的变化と表層的継続という非対称性のシェーマが発生する(p.16)。「交換システム」への転換は交換活動の創意と活性化という長いプロセスを経て、参加者の学習過程を通して新しい交換システムを我が物にして初めて達成されるしかない

(p.19)。この非対称性の進化的構図は以下の章でみるように体制転換生活のあらゆる局面に顕在化する。

「第2章ポスト社会主義の経済システム」は、旧体制の崩壊という無の状態から新しい交換関係あるいは市場関係をどのように生み出すかが民営化のアポリアとして提起される。民営化とは資本の原始的蓄積のことである。このアポリアを解決する唯一の道は、国際機関の専門家の勧めた可及的速やかな民営化でもまたコルナイの主張した市場関係の即時創出と所有関係の漸次的転換でもなく、私的所有関係を即座に導入し、市場関係を構築できる直接投資の導入でしかなかった。だが、直接投資による市場関係の構築の範囲・影響は限定的で、生産と分配、生産と社会での先の非対称性をつくり出し、国庫資本主義と「借り物経済」(「第3章ポスト社会主義の経済システム」)とを産み落とした。

生産面は、民営化で大量に流入した直接投資と多国籍企業が根本的に変えたのとは対比的に、分配の面では、民族的自力での市場経済力の発展が不十分なままで国家財政によって旧社会福祉制度が維持されている。国庫社会主義の継続である。これは生産における国家支配と分配における市場経済依存(所得処分の放任)となっている国家資本主義(例;ロシア)とも異なり、財政支出規模、財政規律、予算の効率運用の点でも他の中東欧諸国と異なる。「借り物経済」とは雇用、GDP、輸出における多国籍企業への依存体質をさす。だが、その外国依存の危険性は学習された

労働規律・倫理、技術、ノウハウが現地にどの程度残るのかでそのメリットが判断される。この「借り物経済」の裏には「ゲストワーカー現象」、多国籍企業と労働者との「中東欧型共生現象」、分不相応な高額報酬に「甘える」体制転換貴族の誕生がある。

同じ視角は「第4章の経済危機下の中欧経済」の分析にも通じる。中欧のなかでなぜハンガリーだけが経済危機の波及効果に直撃されたのか。ここでも借り物の「金融経済」、他力本願、キリギリス化現象が問題となる。「第5章ポスト社会主義の政治システム」は、(1)旧政治家や旧官僚が体制転換後も影響力を行使し続け、(2)旧体制派の者が資本主義制度の構築を推進し、これに対して旧体制での反対勢力が社会主義時代の制度の維持・充実に求めているのはなぜかを問う。この捻じれ現象は、旧体制の平時に誕生した社会主義という外套を纏ったプラグマティズムやオポチュニズムが転換後も継続してきたからである。こうして社会の表層的継続性のなかで政治が引っ張られ、ポピュリズムが誘発され、民族主義が再登場する危険性がある。

「第8章ポスト社会主義の社会分析」は、ブダペストの実生活体験にも裏付けされたものである。社会主義の時代に社会的・市民的規範が劣化した体制転換の後でも蘇生しないという表面的継続を暴く。なぜなら市民や患者、消費者を軽視した役人主権や医師主権、「コメコン事務所」の残存、電子政府の自動化、国会議員の規律弛緩が社会に根を張っているからである。同じ点は「第9章ポスト社会主義のイデオロギ

ー」でも批判される。旧体制の医療制度が続くなかで、社会党連立政権下のネオリベラルな政党SZDSZの推進した医療保険民営化構想は、複数保険制度＝医療保険の民営化で医療サービスをめぐる競争的市場構造を創出しようとしたが、問題は社会保障が適用される医療サービスを提供する主体側にある。民営病院がなくすべて公営病院で医療サービスを提供する医師の経営主権が支配的なままで、医療サービスの質と量の向上の条件やインセンティブがない点が根本問題である。

「第6章歴史評価と統治の正当性」と「第7章独裁権力下の個人と倫理」では、転換における基底的变化と表層的継続の関係をカードール政権の正統性の処理問題、治安警察、独裁権力と関係を持たざるを得なかった政治家、知識人、芸術家の生き方の一貫性(哲学)と正当性(倫理)を軸にして豊かに論じている。

「補遺ハンガリアン・コネクション」にも見られるように、ハンガリーに生活の拠点を移された盛田氏の豊かな仕事ぶりが窺える一冊となっている。体制転換後の中東欧の経済社会を研究する者にとっても待望の一冊だ。そして資本主義の現体制に行き詰まりを感じている社会学者にとっては現体制を診る眼鏡、診断方法に再考を迫る作品となっている。

(たなか・ひろし 立命館大学教授)

編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com> 皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

## 母であり、家庭教師の日々 ベニングみゆき

補習校で出される宿題に、娘と一緒に取り組むようになって1年半。上手に漢字が書けたときは優しく褒めつつ、次に出てくる言葉は「早くしなさい!」「昨日やったばかりじゃない!」という具合で、自分でも鬼ママだと自覚する毎日です。成長した子どもたちが「お母さんが一生懸命になっていたのはこういうことか」と理解してくれる時はいつ来るのだろうか、と自分でも、時々気が遠くなる思いです。

### 2つの学校と家庭学習

娘の梓晏(しあん・7歳)は、1歳の時にハンガリーにきました。ハンガリーの保育園から幼稚園を経て年長になると、アメリカンスクールに転入しました。現在は平日アメリカンスクールに通い、土曜の午前中は補習校で「こくご」の勉強をしています。アメリカンスクールではまだ1年生ですが、補習校では日本と同じ年度を採用しているのです。4月から2年生になりました。

家では、学校から帰ったらまず補習校の宿題をやる様にしています。2年生になって感じるのは、漢字が1年生の時と比べて親の目から見ても驚くほど難しくなったということです。どうしたら覚えられるようになるのか頭を悩ませており、これは補習校の保護者間でも共通の課題になっています。補習校の授業を毎回休まずに受けても、家で毎日コツコツやっっていかなければ大抵忘れてしまうのです。日常生活の中で日本語に触れる機会が少ない環境では、日本語能力の維持、そして向上を図るのは大変難しいことと言えます。まずはコツコツと継続して勉強していくこと。家での勉強が、子どもの年齢が上がれば上がるほど重要な鍵という訳です。

自宅での勉強は、疲れが溜まるほど集中できなくなり、無駄に時間がかかって大きなストレスになるようです。それでも鬼ママが目の前で睨んでいるので仕方なくやっています。短い時間で効率よくやらせようと、親の私の方が熱くなり、私の声のボリュームは上がる一方です。

### モチベーションを持つ難しさ

「補習校に行くのは楽しいけど、宿題は好きじゃない。」これは、補習校に通う子どもたちのほとんどが、口を揃えて言うことです。それは、現地学校や国際学校の勉強に加えて、なぜ「こくご」まで勉強するのか、その意義やゴールが見えにくく、また理解しにくいからだと思います。そしてそれは、なにも娘の通う補習校の子どもたちのみならず、娘と同じ年頃で平日の学校以外にもう1ヶ国語を勉強している子どもたちは多かれ少なかれ同じような状況のようです。(日本人に限らず現地校やインターに通う外国人の子どもたちは、概ね母国語を学校外で学習しています。)しかもどの程度マスターしたい、させたいというのは、家庭環境によっても大きな差があります。

だからこそ、子どものモチベーションも上がりにくいところがあります。しかし、親の方は子どものモチベーションが上がっていないところを、子どもの中で湧水のようにモチベーション生まれるまでは何とか引っ張ろうとしているというのが、現状なのではないでしょうか。

モチベーションが上がりづらいのは、日頃あまり使わない言語という

ことがあるでしょう。その上、平日通う学校からの宿題や読書の課題、習い事などで子どもの方も疲れています。(そして、時間はあっという間になくなってしまいます。)疲れている上に「友達は遊んでいるのに、」という不満も増大して、モチベーションを持つどころではありません。

私やアメリカ人の夫は、娘に、「ニヶ国語ができることは素晴らしいことで、ゆえに、そんな梓晏は特別な存在」と励ますようにしています。しかし、自己満足できるまでの年齢に至っていない子どもたちにとっては、それもなかなかモチベーションアップには繋がりにくいようです。というのも、現地学校や国際学校のお友達との間で他言語を話せる、書けるという、一種の自慢話しは稀にあったとしても、子どもたちの反応は

「ふ〜ん」「へ〜」程度で、話題はあっという間に反れてしまうからです。

### 一步一步

それでも、補習校入学したてのころと比べると、少しずつですが、確実に成長してきたように思います。いまだに、補習校の先生が日々の宿題の成果を見るための小テストを用意してくれても「わからな〜い」とあっけらかんとしていることが多いのですが、それでもテストで良い成績を取った時は、嬉しいと喜ぶようになってきました。つまり、自分が頑張ったことに対する達成感を感じられるようになってきたようです。同じ環境の仲間と一緒にがんばってきた1年半。親子の日々の小さな努力が少しずつ芽を出してきたようです。

今年の5月末には娘にとっては人生初の受験(漢字検定10級)も体験しました。受かるかどうかはさておき、ゴールに向かって頑張ることが出来た事が何より良かったと思います。子どもによっていろいろですが、モチベーションを上げるには、何より自信をつける事が大事だと思っています。娘の場合、ある程度褒める事がとても有効なようです。これで漢字検定に合格してくれたら効果テキメンといったところなのですが。。。まさに、「フダもおだてりや木に登る!」ですね。

いつかこの努力が報われて、成長した娘が「がんばって勉強して良かった!」と思ってくれる日を夢見て、嫌われない程度に毎日コツコツと、鬼ママの努力は続けて行こうと思っています。たとえ目指すゴールが遥か彼方であっても。

最後に。。。。

私たち家族は、この夏日本に帰国することになりました。娘は日本のアメリカンスクールに通う予定なので、引き続き「平日の学校プラス国語の勉強」という生活になる見込みです。従って、私の母・兼・怖い家庭教師という役割も、当面続きそうです。

最後に、「みどりの丘補習校」で机を並べて一緒にがんばってきたお友達、みんなが一緒だから梓晏もがんばれたよ。日本に帰ってもずっとお友達! 大変だけどこれからも頑張てね! そしてお世話になった先生方をはじめ保護者のみなさま、大変お世話になり誠にありがとうございました。みなさんの支えで子どもたちが勉強できる場所があります。今後も引き続きぜひ、子どもたちが楽しく興味を持って「こくご」学習に取り組める様、お力添えをお願いします。

「ドナウの四季」読者の皆さま、ハンガリー「みどりの丘補習校」では現在、小1〜中2まで21名の子どもたちが「こくご」学習に励んでいます。ぜひ応援してください。

## 三キロマラソン

小学六年 望月・海央(もちづきみお)

マラソン大会に出ました。大会に出るのはこれで三回目です。ブタペストの街の中にある森みたいな大きな公園を三キロ半走りました。

走る練習をしたけれど最後まで走れるかどきどきしました。スタートしたときはみんな固まって走ったので、押されたり「どけ」と言われたりしました。ぼくも少し押し返しました。

二キロまでは、軽々走れました。みんな「ハーハー」言っていました。ぼくは一位になりたかったから「一位。一位。」と心の中で言いながら走りました。

でも三キロ目から足もおなかもちたくて、よろよろになってしまいました。もう限界だから歩いてしまいました。そうしたらハンガリー人のおじさんが「あと少しだぞ。残りの力を使って走るんだ」と言って行ってしまいました。だから、ぼくは、「あとちょっとか。じゃあ最後まで走ろう。」と思ってがんばりました。最後まで走ったら、チョコと水をくれました。

完走して「あーやったあ。やっと終わった。ぼくは三キロ半走ったぞ。」と思いました。去年は二十一分で、今年は二十分で走れました。うれしかったです。



## NHKラジオ作文

### ぼくが頑張っている事

小学六年 ラパイ・紀之(のりゆき)

ぼくは囲碁とピアノを頑張っています。

囲碁は六才の時に、ハンガリー人のお父さんに教えてもらいました。でもなかなか囲碁をする機会がなくて、二年間三十級のままでした。その後一年に一回ぐらい囲碁講座に通って、その時は一回で八級くらい強くなりましたが、また囲碁をする機会がなくて、級が上らないままでした。二年前の夏休みに日本に行った時、コミュニティーセンターの囲碁クラブに通わせてもらって、おじさんたちに教わりました。その時はだいぶ強くなりました。

去年の夏、チャバという日本で囲碁の勉強をしていた人の講座に通ったら、一週間ですごく強くなりました。ぼくが残念なのは、囲碁大会がいつも土・日にあって、補習校に通っているぼくは土曜日の午後からしか参加できない事です。いつも一回戦は不戦敗になってしまいます。このごろぼくは日本では三級だと言うお父さんにも、たがいで勝っています。

ピアノは去年のブダペスト市十一区のコンクールでゆう勝したので、この一年いろいろなコンクールに行くはずでしたが、二〇〇九年の夏の終わりに手が病気になるので、たくさんコンクールをキャンセルしてしまいました。これから手を治して、またコンクールに行けるようにいっぱい練習をしたいです。

これからもぼくは、囲碁とピアノを頑張り続けるつもりです。



教育の魅力へと

デブレツェン大学大学院

窪田 さやか

私は最初に、ピアノ演奏を学ぶためにリスト音楽院に留学をしました。演奏技術の向上を目指し、努力を続ける中で、ハンガリーの教授達の指導者としての考え方や教育方法論に深く感銘を受け、教師として教育学、心理学を特に学びたいと考えるようになりました。EUのピアノ教職免許取得(ポロニヤシステム)を目標に、デブレツェン大学大学院に入学しました。デブレツェンはブダペストに次ぐハンガリー第2の都市でもあり学園都市です。自然が豊かで美しい町並みが印象的なところでした。

大学院では専門科目のピアノ演奏とピアノ指導法、室内楽などその他音楽関係の科目に加え、教育学方法論、英才教育、学校開発、心理哲学、精神衛生学、障害教育、など多岐にわたる科目を学習しました。教授と学生のディスカッション形式の講義に初めは戸惑いましたが、参加して多くのことを学ぶことができました。初回の講義は教授と学生双方の自己紹介から始まり、自然と打ち解け合うことができました。その後、教授達は各自の個性を發揮し、非常に熱のこもった講義を展開します。それを聴いている学生も積極的に疑問があれば即座に、頻繁に質問をし、すぐに教授もそれに応答するのですが、この対応の早さには大変驚きました。

日本の大学のように指定されたテキストなどはありませんでしたが、自ら探求して学ぶ姿勢が必要で、彼らから、その必要性を私も十分に学ぶことができました。専門の知識・技能を身につける以外に、自ら求め、考えることの重要性、インスピレーションを大切にすること、教育的効果を高める個人の意欲を喚起する指導法などを学びました。大学の音楽学部の学生を受け持つ教育実習もありましたが、学んだことをそこの指導に生かすことができました。

専門科目のピアノの指導は1対1で行われました。担当して下さった教授は、まるで親子のように愛情深く指導して下さい、私は大変感銘を受けると共に、心強く感じました。クラスメイトには既にオーケストラに所属してい

る演奏家や教師をしている社会人が数多くいました。私がテキストもなく、全ての講義をマジャール語で受けていることを心配して、聞き取れなかったことを教えてくれるなど多くの仲間が助けてくれた事など、とてもありがたかったです。ディプロマコンサート、度重なるレポート提出と試験、論文作成、集中ゼミナール、そして筆記と口述による国家試験はハードでしたが、ハンガリーの人は皆本当に愛情深く、私は、様々な場面で支えてもらったことを心から感謝しています。

6月20日に行われた卒業式は、私の予想をはるかに超えていた位、厳粛な上に盛大に行われました。私達卒業生はアカデミックマントを着て角帽をかぶり参加しました。私は学長から直接舞台で卒業証書を渡され、無事ピアノ教職修士を取得しました。満席の人々から大きな拍手を受け、記念に残る素晴らしい1日となりました。



私は親しんだハンガリー生活に別れを告げ、まもなく日本へ戻る事となります。ハンガリーに来たばかりのころは、言葉の壁や文化の違いに戸惑いましたが、今ではハンガリー人の親友もたくさんできました。ここでは芸術が市民のくらしに深く根付いており、街の至る所で様々な演奏会が多く催され、気軽に足を運ぶことができます。私自身も演奏する機会を多くもつことができました。この地で学んだことを生かし、一人一人の個性を尊重した教育を目指し、後進の指導に取り組みたいと願っています。そして、ハンガリーの皆さんとの温かい心の絆を今後ずっと大切にしていきたいと思います。

私を大きく変えたもの

リスト音楽院ピアノ科

町田 百合絵

日本の大学学部時に、故神野明先生からフランツ・リストの敬虔な音楽の素晴らしさを教わり夢中になった私は、以来多くのリスト作品を演奏し日本の音楽大学大学院において研究も行ってきました。当然ヨーロッパ、ハンガリーに憧れはあったものの、今一つ留学というものは私の中で夢のようなものでした。しかし、3年前にあるセミナーで2週間ブダペストに滞在したことが、この留学の大きなきっかけとなりました。リストの代表作である『ピアノソナタ 口短調』を修了審査会で演奏するにあたり、是非リストの母国で勉強し、何かヒントを得られればと参加(初めての海外!)を決め、念願のリスト音楽院でレッスンを受け、帰国前にはこちらの学生と一緒にコンサートに出演しました。また、リストが生まれたショプロンの生家も訪れました。ずっと憧れていたヨーロッパに初めて来られた喜び、東欧ならではのどこか哀愁の漂う街並や建築物の素晴らしさ、美しい夜景、人々の温かさ、気候や空気の違いに大きな感動を覚え、また2週間アパートで自炊をしていた為、こちらでの生活の勝手も何となく分かり、成田に着く頃には、私の中でハンガリーへの留学というものが現実味を帯びてきていました。その後、日本の大学の博士課程に進学し大学院海外派遣奨学生として1年間留学出来ることが決まり、私は迷わずハンガリーを選びました。日本では講師や伴奏者としての活動が多かった為、この1年はひたすらソロに専念しようと決め、前半は今まで取り組んだことの無い作曲家の作品に挑戦し、後半はリストを中心に、リサイタルやコンクールに向けて勉強しました。先生は毎回本当に熱心に御指導して下さい、柔らかく美しい音の出し方、ハーモニーや声部バランスの重要さ、無駄の無い身体の使い方、安全なテクニック、各作曲家に適切な様式や音色の選び方などを学び、また、音楽とは常に美しく、心が込められたものでなくてはならない、聴き手が聴きたいのは、弾き手のテクニックではなく、その先にある作品・作曲家の世界である、という音楽の根本でありながら、つい毎日の練習で見失ってしまいがちな事を再認識し、この1年で

意識をも大きく変えて頂きました。

基本的にチケット代の安いハンガリーでは多くのコンサートを聴くことが出来ましたし、声楽が好きな私は、週2日のペースでオペラ座を訪れていました。日本ではなかなか出来ない、ヨーロッパ留学ならではの贅沢な経験だったと思います。



またこちらにいるうちに、他のヨーロッパの国々にも足を伸ばしました。ドイツでは、パイロイト・ワイマール・ライプツィヒなど音楽縁の地を中心に訪れました。パイロイトでリストのお墓を実際に見たときには、それまで何となく架空人物のような感覚でしたが、初めて本当に実在した人だったのだと実感し、何とも言えない感動がありました。イタリアの国際コンクールでは、各国のピアニストと友達になり、また沢山の参加者の個性豊かな演奏を聴くことが出来、とても貴重な勉強になりました。留学のまとめに、旧リスト音楽院でソロリサイタルを行ったり、また諸コンサートに出演し、こちらの合唱団の方々とハンガリーの合唱曲をアンサンブル出来た事は、とても素敵な思い出となりました。「外国語を話し、自国と違った文化、環境の中で生活する事が、必ず音楽に大きな影響を与えてくれる」と留学を薦めて下さった先生のお言葉を、今は身を以って実感しています。

この1年間、先生方、家族、友達、他本当に沢山の方々を支えられ、楽しく充実した留学生活を送る事が出来ました。その感謝を忘れずに、また日本で頑張っていきたいと思います。

ここハンガリーで学び経験したこと全てが、これからの音楽生活の大きな糧となり、また人生を豊かにしてくれることと思います。

ここで得た宝物

リスト音楽院大学院ヴァイオリン科

森垣 静香

ハンガリーに来てから約4年が経とうとしています。すばらしい先生方、沢山の友達にめぐり合え、すばらしい経験&いろいろなることを学びました。

まず、恩師にあたるサバディ先生には沢山のことを教わりました。コンサート本番でベストの演奏をする為の準備の仕方、全部の音をコントロールして弾かなくてはいけないことなどを細かく教えていただきました。ディプロマコンサートの前には本番を何回も作ってくださったり、オーケストラとのリハーサルに来てくださってアドバイスをくれたりと、とても感謝しています。

ディプロマコンサートではバッハのソロソナタ、ベートーヴェンのヴァイオリンソナタとチャイコフスキーのコンチェルトをソルノク交響楽団と共演させていただいたのですが、今までコンチェルト1曲を1つのコンサートで弾いたことすらありませんでした。まして約1時間半のプログラムをリスト音楽院の大ホール&オケバックで弾くことなんて私には出来るのだろうかと不安に押しつぶされそうになりました。そんな私をサバディ先生は不可能ことはない、君にはできる、自分を信じなさいと嬉しい言葉をかけていただき、自信へと繋がりました。

オーケストラの団員の方々もとても親切で、休憩の間などに話しかけてくれたり、アドバイスをくれたり、緊張している私に笑顔で微笑んでくれ緊張を和らげてくれました。とても心強かったです。

コンサートには沢山の観客の方々にきていただき本当に感謝しています。約1時間半弾ききるには体力的&精神的にもすごく大変なことだったのですが、沢山の観客&オーケストラの団員の方々からエネルギーをいただいて、本番は楽しく思いっきり演奏することが出来ましたし、不可能を可能にする力は誰にでも持っているのだなと思いました。

日本ではソロを中心にやっていたのですが、こちらの大学院に入ってから室内楽も必修ということもあり、室内楽のレッスンからもソロのレッスンとは、また違った観点からの良い

経験も出来ました。特にバルトークを学んだ時には、このリズムはマジカルという言葉から来てるからこう弾くんだよと言われた時、音楽は言語と深いかわりがある事をあらためて実感させられた瞬間でした。

沢山の友達にも恵まれ、嬉しいときなどは心から一緒に喜んでくれたり、困っているときには優しく手を差し伸べてくれたりと、いろいろな事を乗り越えられたのも、素晴らしい友人の支えがあったおかげだと思っています。

大学院の授業は、オーケストラ以外は全部英語で受けていました。週2回のソロのレッスンの他に、普通の授業、室内楽レッスンもあります。オーケストラではもちろんハンガリー人達にまじって一緒に演奏します。ハンガリーの人たちもすごくフレンドリーで沢山の友達ができました。

ベートーヴェンの交響曲全曲を1日でやるコンサートの時に私はハンガリー国立交響楽団にまじって1曲ではありましたが弾かせていただく機会を与えてもらえて、とても素晴らしい経験が出来ました。なんといっても指揮者のコチシュさんには感動させられました。今後は今まで学んだことを生かし、ハンガリー語を勉強しつつ、コンサートに聞きに来てくれたお客さん達に音楽って素晴らしい、また聞きたいな、と思ってもらえるような、よりよい演奏を目指し、感動を与えられる演奏家になれるように日々がんばっていききたいと思います。



ハンガリー滞在回想記

高橋 幸二

私は、2006年8月から2009年6月まで、日本大使館(経済担当)に勤務するためにブダペストに滞在していました。帰国直前に盛田さんから執筆を依頼されていたものの、帰国後の忙しさなどにかまけて執筆が遅れたままでいましたが、帰国からほぼ1年という一つの区切りを迎え、かつ、日本との生活の違いから懐かしさをたびたび感じるようになり、ようやく筆を執るに至りました。回想されること全て書こうとするかなりの長さになってしまいそうなので、今回は特に強く印象付いていることをいくつか述べたいと思います。

ハンガリーに滞在するまで、公私ともどもヨーロッパには何度か訪問したことはありましたが、いずれもイギリスやフランス、スイスといった西欧諸国ばかりで、ハンガリーに一番接近したのはウィーンまでと、ハンガリーとは縁はありませんでした。そのような状況下、期待と不安が当然のように入り混じる中で赴任の途につき、ハンガリー滞在がスタートするわけですが、3年弱という短い滞在中で一番悩まされたのは言葉の壁でした。英語ができればとりあえずは何とかなるだろうとある意味「根拠のない自信」を持っていましたが、その自信もあつという間に砕かれました。思っていたよりも英語が通じず、街中で見かける表記は殆どがハンガリー語と、赴任前の勝手な予想が見事に外れた格好です。一見してわかるものはいいのですが、レストランのメニューやスーパーでの買い物など日常生活の中で言葉の壁にぶち当たったことは数知れません(この点、職場でのハンガリー人スタッフやハンガリー語が堪能な日本人の知り合いには感謝しきりです)。中でも残念なのは、買い物などの機会です。スタッフの人たちが丁寧に説明してくれたりするにも関わらず、殆どが理解できないことや感謝の念を伝えられないことでした。ハンガリー人には親切な人が多く、そのような機会が多かっただけになおさらです。この点は、自分の中で今後に向けた大きな反省点にしようかと思っています

一方、自然の豊かさは素晴らしかったと思います。冬場の寒さもなかなか厳しいものでしたが、春の新緑の鮮やかさ(特にくさり橋やマルギット橋から見るブダ側)には

いつも感心していたものです。郊外に出れば、春には菜の花、夏にはひまわりが広大な土地で一斉に花を咲かせる光景があちこちで見られ、見るたびに「この光景は日本にはないなあ」と感じ、今でもその光景はよく思い出されます。現在は東京勤務ですが勤務先の周辺はビルばかりで、中心部でもあれだけ緑が豊富なブダペストとは大きな差を感じています。加えて、食べ物についても、春になるとアスパラ、鞘付きのまま売られているグリーンピース、イチゴ、サクランボなどその季節にしか食べられない野菜・果物が多く店先に並び、ときには道端で農家の人たちが直売するなど日本以上に季節感が感じられ、非常に楽しめました。ただ、いろいろな人から春の一時期にサクランボをもらった結果、食卓には毎食サクランボが並ぶことになり、ハンガリー滞在中の3年間で果たして日本で食べる量の何倍ものサクランボを食べたのか、全く想像が付きません。毎日、あれほどの量のサクランボを食べ続けることは今後なさそうです。

仕事の面で強く印象に残っている点を挙げれば、2008年秋に発生した金融危機です。賛否両論はあつつも、当時のジュルチャーニ政権が進めていた緊縮財政政策が奏功してか経済も僅かながら上向きでしたが、IMFやEUに財政支援を要請することになるとは全く予測していませんでした。当時、世界的にはリーマンショックによる金融危機のさなかにあったものの、ハンガリーには直接の影響はないと見込んでいたところにこのような事態が発生し、ハンガリー経済にとっては国内外で厳しい状況にあったと思います。その当時、ハンガリー国内にいる日系企業の方々や日本からもハンガリーの状況について問い合わせを受けることが多くありましたが、必要以上に深刻に捉えられないような対応に努めました。

以上、ハンガリー滞在中の回想をほんの一部述べさせていただきました。もちろん滞在中に不愉快な思いをすることもありましたが、帰国して1年近くも経つと残っている印象は良いものばかりです。ただ、このように良い印象を多く持ったままでいられるのも、滞在中に御縁があった多くの人々の力添えがあってこそで、最後にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。いずれは一旅行者としてハンガリーを再度訪問し、お世話になった方々との再会を楽しみにしています。

私が見てきたハンガリーのテニス



盛田 常夫

今では想像もつかないだろうが、1970年代から80年代にかけて、ハンガリーのテニス選手は欧州でもトップレベルにあった。タローツィ・バラージュ、マハーン・ロベルト、スーケ・ピーテル、ベニック・ヤーノシュという面々がハンガリーを代表する選手で、彼らはドイツ、スペイン、ユーゴスラビアなどにテニスコーチの出稼ぎにでかけることができる時代だった。当時はまだ、ドイツでもテニスは人気がなく、ソ連にもこれといった選手がいなかった。

この時代のハンガリーのテニスは典型的なクラシック・スタイルで、オーストラリアのローズウォールを手本とするようなフォアはドライブ、バックはスライスの綺麗なテニス。現在ハンガリーの女子チームの監督をしているマハーン・ロベルトが1981年に日本へ観光にやってきた時に、その年の学生王座をとった法政大学テニス部に連れて行き、個人戦準優勝の村田有季彦選手と対戦してもらった。持参したラケットのガットが切れたので、マハーンは学生から借りたラケットを手にして、最初のレシーヴ・ゲームこそ失ったが、後は6ゲームを簡単に連取した。「今まで見たこともないようなバックハンドのスライスが、手許で伸びてくるので非常に打ちづらかった」というのが、村田君の感想だった。マハーンは日本で言えば神和住、坂井や九鬼の世代の選手で四大トーナメントにも出場した経験をもち、当時は全盛期を過ぎていたが、まだデ杯選手だった。今年の全豪決勝でフェデラーに負けたマリーが同じことを話していた。「フェデラーのスライスが低く伸びてくるので、前へ出ることができなかった」と。

時期は前後するが、1980年1月に欧州チーム対抗戦Kings Cupがあり、フランス・チームとの試合を見に住商駐在員の飯尾さん(現、大吉店主)の車でジュールへ出かけた。この時のフランスのシングルス・プレーヤーの1人が、すでに引退してシニアの大会に出ているルコントである。まだ弱冠17歳の少年だった。左利きの彼はコナーズを真似て、両手打ちのバックハンド、バネを活かした速いサーヴを打っていた。これを迎え撃ったハンガリーの選手がクハルスキー・ゾルターンで、前年のジュニア世界チャンピオン。クハルスキーはこの年のデ杯対スイス戦の後に、ハンガリーに戻ることなく、スイスに留まった。当時の言葉で言えば、亡命である。この後、クハルスキーはスイスのデ杯選手になり、現役引退後はスイスを拠点としながらドイツのアンケ・フーバー、アメリカのカプリアティ、セルビアのイヴァノヴィッチ、ハンガリーのサーヴァイのコーチを務めてきた。

ハンガリー選手の中で、もっとも輝かしいキャリアを築いたのは、タローツィ・バラージュである。シングルスでは1982年に世界ランク13位にまで上り詰めた。ダブルスでは全仏とウィンブルドンで優勝し、1985年にはダブルス世界ランク3位にランクインし

た。彼のダブルス・パートナーが、スイスのハインツ・ギュントハルト。1981年の全日本オープンでタローツィは単複とも優勝したが、その時のパートナーもギュントハルトである。当時、タローツィの試合を見るために、田園コロシアムのコートにでかけた。

タローツィはクロアチアのイワニセヴィッチを発掘し、一度だけ、師弟でダブルス戦に出場したが、準優勝に終わった(1990年ベルギー室内)。ギュントハルトは長らくシュテフィ・グラフのコーチを務めていた。ギュントハルトには2歳年上のテニス選手、マルクス・ギュントハルトがおり、この兄弟はスイスのデ杯選手として活躍した。マルクスの方は事業家として成功し、各種のプロテニストーナメントの主催を委任されている。

このようなテニス環境をもつスイスで、フェデラーも育ったのである。

テレビで偶然に観た今年のウィンブルドン大会の招待ダブルスで、ハンガリーのテメシュヴァーリとチェコのスコヴァの往年の44歳と45歳のプレーヤーが、ヒンギスとクルニコヴァの15歳も年下のペアと戦っていた。テメシュヴァーリの状態はかなり良く、このゲームに準備してきたことが分かったが、14個のグランドスラム・タイトルをもつスコヴァはロブとドロップショットだけでベストにほど遠い状態だった。

テメシュヴァーリを最初に観たのは1979年のブダペスト。当時まだ13歳の少女だった。両親がバスケットボール選手で、父親がテニスを教えていた。1球ごとにスタンドで観戦する父親が大声で指示するものだから、コート上のアンドレアが言い返すという激しい親子の情景を目の当たりにした。1981年に東京で開催されたフェデレーションカップにハンガリー代表として弱冠15歳で国際デビューした。この時は足を痛めて途中棄権したが、夜は銀座の焼き肉店で慰めたのを覚えている。

アンドレアはこのデビューを契機に、世界ランキングのトップテンに入り、一躍世界の注目を浴びたが、父親との確執や怪我、コーチ不在が影響して、高いランキングを保持することができなかった。父親は今でも2区のVASASコートで素人相手のテニスコーチをしている。テレビのゲームを見る限り、アンドレアはそれなりのトレーニングを積んでいるようだ。185cmの上背、80kgはあろうかと思われる体格だが、軽やかに体を動かしていた。

スポーツの伝統は受け継がれる。それは多分、優れたコーチによるノウハウの伝承があると考えられる。選手を育成する教育手法が受け継がれるからだ。テニスは昔からチェコが強かったのも優れたコーチがいたから。ハンガリーもそこそこだったけど、いつもチェコの後塵を拝していた。現在、女子テニスは3名ほど世界ランク百位以内に入っているが、トップテンへの躍進を予想されたサーヴァイ・アーグネシュは30位前後で低迷している。男子テニスのレベル低下はひどいものがある。1950年代に世界を席巻したサッカーも長期低迷を続けているし、五輪連覇を達成している水球もライヴアルの追い上げが急である。スポーツ大国だったハンガリーの面影が見られないのは寂しい。資金不足もあるだろうが、選手育成のシステムに問題があるのではないだろうか。

## スポーツ行事・運動サークル情報

### ソフトボール大会(商工会主催)

2010年春季大会の結果(5月9日)

優勝:笑好会Cチーム  
2位:住商連合チーム  
3位:商工会Bチーム

「まさか3連覇できるとは思っていませんでした。選手と応援団とが一丸となつての勝利ですからとてもうれしいです。秋の大会に4連覇を狙ってみます」・成田(TDK)監督談

### バドミントン部

(1) 部員数:大人25名、子供10名

(2) 活動状況:毎日曜日16:00~18:00

3面を使用し12~15人の大人と約10名の子供が30分程度のウォーミングアップ(初心者指導、基礎打ち)の後、経験者と初心者に分かれ、或いは時にMixして、ダブルスを中心とした試合形式で楽しんでいます。

(3) その他:6月中旬から初心者向けの教室を開きました。

・シャトルは部で用意しますが、自前の体育館用シューズをご持参ください。

・ラケットは貸出しできますので事前にご相談ください。(8月は体育館の都合で休み)

代表者:植條 公士(連絡先: hujpbad@gmail.com バドミントン部専用メールアドレス)

### ランニング・レース情報

9月 5日 NIKE 国際ハーフマラソン大会(リレーあり)  
9月26日 SPAR 国際マラソン大会(30Km、リレーあり)  
10月17日 Coca Cola 女子ランニング大会  
(10km、3.5km、リレー)



Japan Coop Kft.: 1025 Bp, Cimbalom u. 7.  
Tel.: 345-0450 Fax: 345-0008  
e-mail: paprika-tsushin@jpc.hu  
ホームページ: www.paprika-tsushin.hu/  
登録は無料ですのでE-Mailにてお申し込みください。

### ゴルフ部

月例会の結果

<日付>	優勝	2位
3月28日	成沢(伊藤忠)	加藤(大林組)
4月11日	清水(スズキ)	柿崎(スズキ)
5月16日	高橋(伊藤忠)	岡崎(菱和)
6月 6日	平松(住商)	岡崎(菱和)

Pannonia World Cup(世界選抜)の結果

6月13日 優勝:ハンガリー選抜、2位:アイルランド選抜、  
3位:日本選抜Bチーム  
ドイツ、フランス、ハンガリー x 2、オーストリア、アメリカ、アイルランド、EU混合、日本選抜 x 3 の計11チーム32名参加、町野・宮崎・栗原選手のチームが大活躍、入賞!

第6回四カ国対抗親善ゴルフ大会(Jetro Cup)の結果

6月20日(日)於 Pannonia Golf Course 幹事国:ハンガリー  
優勝: チェコ選抜チーム(543点)  
2位:ハンガリー選抜チーム(558点)  
3位:オーストリア選抜チーム(570点)  
4位:スロバキア選抜チーム(573点)  
<上位6選手の合計ストローク数>  
個人優勝:高木(スロバキア)、2位:石川(スロバキア)  
3位:坪野(チェコ)

第12回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権(途中経過)

準決勝進出:成沢(伊藤忠) vs 平松(住商)  
準々決勝進出:岡崎(菱和) vs 高橋(伊藤忠)  
加藤(大林組) vs 坂梨(丸紅)

### テニス部

テニス部(土曜・日曜) 的場 英門(日曜幹事)

2010年4月

冬用テントの撤去に伴い、土曜・日曜テニス交流テニス会を開催。

総勢12名(男性11名、女性1名)で3時間、12試合を行い、試合後は日本食レストランで懇親会。

今後の活動予定

夏:テニス試合、BBQ、親睦会

秋:土曜・日曜交流試合

土曜・日曜チーム共にメンバーの募集中です!  
ご興味のある方、ご連絡をお待ちしています♪

土曜:杉本(代表者) Arpad1162@yahoo.co.jp  
日曜:的場(代表者) h-matoba@exedy.com

## 追悼 カシュ・ヤーノシュ(1927-2010年)

ハンガリーを代表するグラフィック画家・彫像家カシュ・ヤーノシュが82歳の生涯を終えた。グラフィック画をベースに版画や書籍カバーデザイン、切手デザイン画など幅広く活躍し、コシュート賞やムンカーチ賞など数々の受賞を重ねた。

私が初めてカシュと出会ったのは1983年春である。その年の初めに経済学者コルナイ・ヤーノシュを法政大学社会学部創設30周年記念講演に招聘した後、春にブダペストのコルナイ宅を訪ねた折、壁にかかっているカシュのグラフィック画に関心を寄せたのがきっかけだった。ちょうどコルナイの日本講演の論文集を岩波書店の現代選書シリーズで発刊する予定があったので、すぐにカシュを紹介してもらい、コルナイ宅を飾っている「不足の経済学」をテーマにしたグラフィック画を日本語出版に利用することを快諾してもらった。

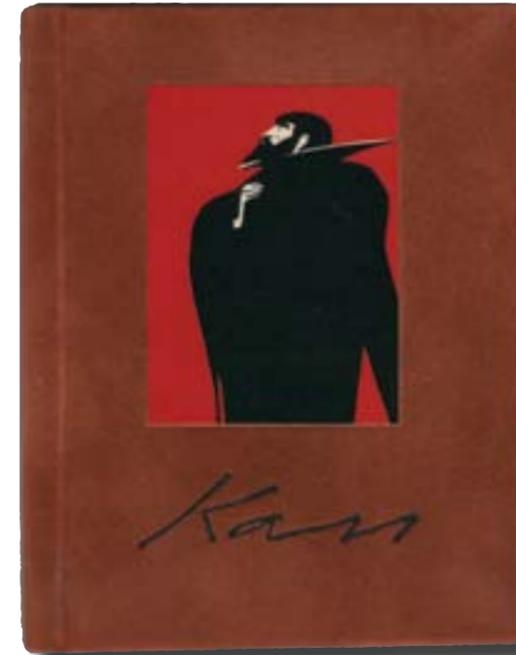
以後、私の著書や訳書の表紙や各章を飾る挿絵にカシュのグラフィック画を使ってきた。訳書『異星人伝説』(日本評論社、2001年)の表紙にはプラスチック製の塑像にわずかなデザインを施したものを使用した。また、昨年発刊したハンガリー語版の小著の表紙デザインを依頼したのが彼の最後の仕事になった。肺癌の化学治療を受けていてなかなかアイデアが生ま

購入した。その10点の作品が事務所の壁を飾っている。事務所の「カシュ・ギャラリー」を訪問するように何度か催促したが、いずれも体調が悪く実現しなかった。それでも、昨年3月の小著の出版記念会に駆けつけてくれ、祝辞をもらった。

カシュ家はユダヤ人一家として1850年にセグドの町に定住し、文化人が集うKass Hotelの所有者として、セグドの名家になった。祖父の死(1928年)と世界経済恐慌の影響でKass Hotelの経営が行き詰まり、Kass家の手を離れた。体制転換の後、廃墟になったKass Hotelを韓国系の企業が再建するというので、在りし日のKass Hotelの写真をもとに詳細な図柄を描いていたが、この話はたち切れになってしまった。ヤーノシュの無念は如何ばかりだったのだろうか。

戦後、ブダペストに移ったKass Janosは工業デザイン大学などで習得を積み、グラフィック、彫像、版画、切手デザイン、書籍カバーデザインの分野で名声を得た。前夫人はやはりハンガリーを代表するゴブラン織りの芸術家ハイナル・ガブリエラである。肺癌治療を始めてからは長年の恋人だった翻訳家のバンキ・ヴェラが引き取り、面倒を見ていた。昨年、ヴェラから二人の婚姻届けを出したことを知らされた。

Kass Hotelの御曹司として悠々自適の人生をおくるはずだった



代表作「青髭公の城」をテーマにした版画



出版記念会(2009年3月)のカシュとヴェラ

れないので、彼の作品の中から小著のテーマに近い図柄を選び、それをベースに図案を描いてもらった。

彼の作品の中でも、バルトークのオペラ「青髭公の城」を主題にした版画が好きで、新しい事務所を開いたときに10枚の版画を



在りし日のKass Hotel(セグド)

が、戦前から戦後にかけてのハンガリーの激動の中で、Kass家とヤーノシュの人生もまた、思いもかけない道をたどった。カシュ・ヤーノシュの人生は20世紀の変動とともにあった。

盛田 常夫

インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

# 人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法：事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: [admin@byool.com](mailto:admin@byool.com) 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ：上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

## 日記・エッセイ



自分のページを持てる。  
日記、エッセイ、ブログ、  
記録として。

## コミュニティ



同じ興味・関心を持つ  
仲間の交流の場。  
OB/OG会にも。

## 豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、  
そこから生まれる新しい  
発見や気づきが、  
人生を豊かに輝かせるものに。

## 安心・安全



無料会員制。  
SNSのメンバーだけが利用  
できるクローズドなサービス  
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

## BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かず優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>

たくら  
DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等  
名刺1枚からご希望の言語にて  
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、  
内装工事、翻訳から印刷まで  
幅広く受け承っております。  
お気軽にお問い合わせ下さい。



SAKURA DESIGN: [info@innerdesign.hu](mailto:info@innerdesign.hu)  
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.  
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

[www.innerdesign.hu](http://www.innerdesign.hu)

## Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを  
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ  
ローバルな企画・マネジメント展開を行って  
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、  
各楽器講師紹介なども随時承っております。

### Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6  
Tel&Fax: +36-1-786-7846  
Mobil: +36-70-3815548  
e-mail: [propart@chello.hu](mailto:propart@chello.hu)  
web: <http://propart.client.jp/>

Propart